

仙臺侯は前に話した通り萬治二年に初入部があつて、翌萬治三年子年の春三月に再び江戸に参観された。丁度此年に幕府が小石川濠の普請を始めた。そして其普請の手傳を仙臺へ言付けた。かういふ様に國大名が襲封後間もなく幕府から普請手傳など云ふ國役を申付けられる慣例は以前から幾らもある事であつた。此普請は牛込から神田の和泉橋の處までの溝渠を浚渫て、其揚げた土で土堤を築くのである。土手の長さは六百六十間即ち十一町も間數があつたと云へば、随分大きい作事であつた。仙臺侯はこの普請のために此年の五月から小石川の水道橋のそばにあつた吉祥寺（今の駒込吉祥寺はその後改めて此處に移つたものなり）といふ寺の前の作事小屋へ毎日詰めたのである。さうして外に出る機會の多かつたのを善いことにして甚だしい亂行のあつたものらしい。此時仙臺侯の年齢は幕府への表面は十八歳であつたけれど、實際の年は二十一歳であつた。年頃では有るし、闊達の氣象の若殿であつたから、其亂行は随分世間の目に立つた。尤も前にも記したやうに此頃の大名といふものは、後の大名のやうではなく随分色町を涉獵つたもので、それは少しも珍しくない。仙臺侯も伶俐な性質であつたけれど、元來大酒を好み酔へば氣も荒くなつたから、行儀も世間の評判などに頓着しない。それで最初の内こそ藩の重なる人々の間だけで、あれでは實に困つたものだ云ふやうな評定のあつたばかりであつたけれども、もう此頃になつては江戸中の評判となつたのである。そして其年の七月に隱居の身分になつたのだから、仙臺侯の家督を繼がれてより隱居までは丸二年で、其内江戸に居られたのは僅に一年ばかりである。而るにその一年許りの間に世間一般の評判になる程の亂行があつたと見れば随分一

一 襲封 子孫または諸侯が領地を受け継ぐ事。

通りならぬことである。と云はねばならぬ。前の古内の遺言などを考へて見ても、仙臺侯は若殿で居られた時分から大酒をして、氣が荒くて何うもあぶない人であつたらしい。それで當主になつてから愈々悪さが募つたものと見える。しかし其悪さがどんな風の悪さであつたか充分に委しいことは分らない。伊達顯祕録など、云ふ俗本には、酒亂で癩癩を起して無闇に家來を手打にしたの、角力取りのやうな下賤のものを侍に取立て、吉原通ひの供をさせたのと書いてある。勿論悉く信ずるには足りないが、しかし免に角亂行がひどかつたには違ひない。當時始終仙臺侯の氣に入りで、太鼓をたゞき遊女通ひの供なども一所にしたもの、中には、浪人から召かかへた坂本八郎右衛門といふ六百石取のものもあつた。又た其の頃江戸で名高い匹田流の槍術家で劍術にも達して居た、渡邊九郎右衛門と云ふ浪人もあつたが、これは金二十兩二十人扶持で仙臺侯に抱へられた。それから舊臣の内での殿の氣に入りは畑與五右衛門、宮本又市などもあつた。かういふ家來共を連れて新吉原などへ盛んに通はれたものと見える。或時は家老の茂庭周防が夜中に自分の姿をすつかり變へて殿を捉まへて屋敷に歸つて諫言をしたと云ふ作話のやうな面白い談もあるが、これは作話でなくて事實であつたらしい。仙臺侯の亂行は斯様な次第であつたれば、二代目高尾の處へ通はれたと云ふのも全く有り得べからざることではないが、しかし史學の上から言へば高尾通ひの説は全く無證據のことである。二代目高尾といふのは江戸を去る四十里許り野州鹽原鹽釜村といふところの生れで父を長助といつたと云ふことである。一體美人と云ふものは必ずしも都會に生れるとは限らない。漢代の明妃と云ふ美人の故郷も片山里である。野州鹽原と云へば草茫々たる田舎である。しかしながら斯る邊土にも天の生せる麗質琢かざれども光る珠の如きものもある。其の頃高尾とともに廓に美人の名の高かつた薄雲と云ふのも信州埴科郡鼠

宿の産であつたと云ふことである。深山にも花は咲く、人の訪はざる溪間にも蘭は芳香を吝まない。勿論高尾や薄雲が始めから安らかに田舎に暮らし、氣も心も知り合つた村人の妻となり、罪もなく、憂もなく村中の花と呼ばれて、其のまゝ世を終つたならば、それが一番當人に取つて幸なことであつたらう。然るに薄命は美人の常とやら、美しいのが身の仇になつて、今に至るまで浮名を流して居るのは誠に氣の毒のことであると我等は考へる。しかしこれは此話に關係のない餘談であるから此の位にして、扱此高尾に限らない、此頃の遊女と云ふものは随分教育のあつたものである。遊女風情に教育など、云ふと可笑いが、しかし賣物に花を飾ると云ふこともある。大名高貴の人にも付き、其氣に會ふやうに機嫌を取るのには、それ相應の教育がなくてはならぬ。「吉野山峯の白雪ふみわけて入にし人のあとぞ戀しき」と云ふ即吟をする程の靜であつたればこそ、義經の寵愛を蒙つたのであらう。なんでも高尾の在所の鹽原には近頃まで高尾が自分で書き抜きをした源氏物語、つれづれ草などが残つて居つたさうである。それだけでも高尾が今日の女郎のやうな色を賣るだけの女ではなかつたことが分る。蜀山人の「一話一言」に高尾の文と云ふものが載せてある。

けさの御わかれ、なみのうへの御歸路、御やかたの御しゆび、いかゞ御あんじ申候。わすれねばこそおもひ出さず、かしく。

千里さま

高尾

或人の説に此ふみが眞ものならば多分仙臺侯に上げたのであらう、千里の奥と云ふのを利かせて奥州の殿様ゆゑ、千里さまといつたのであらう、わすれねばこそ、おもひ出さずとは名高い文句である、多分君は我を思ひ出したまはじなど云ふ癡話喧嘩のあとで出来た文章でがなあらうとのことである。しかし是は多分好事家の作話らしい。前に話した鬼貫といふもの、ことを書いた浄瑠璃本の中に高尾は深川の浮世といふ大臣に馴染を重ねて外の客には強く當つたといふことが書いてある。勿論浄瑠璃本のやうなものは事實とするには足りないが、しかし其時分の江戸の遊女が上方のやうではなく、賣物にして賣物にあらず、氣に向かなければ身を任せぬといふやうな氣質のあつたことは疑ひもないことであるから、高尾にも身を許して行末を誓つた男があつて、其男の爲めには他の男につらく當つたやうなことがないとは云へぬ。されば島田重三郎といふ二世を言契した男があつて、その爲に仙臺侯を振つたと云ふやうな事はたとひ相手が仙臺侯でなくても或は類似した話があつたかも知れない。それから浄瑠璃本の中に高尾は餘り外の客につらくしたので、怨まれてとう／＼暗撃にされて橋場村に葬られたといふことがある。高尾が殺されたと云ふのは古い言傳へであつて、仙臺侯の事を書いた俗本の作者がそれに取合はせて三叉の高尾殺しなど、云ふことを考へ出したのではあるまいか。しかし前に記した「寒風にもろくもくちる紅葉哉」といふのが若し辭世なれば人に殺されたといふのは間違であらう。我等にはどちらだか分らぬ。こゝに其頃の事であらう、橋場村淺茅が原の鏡が池に身を投げた遊女があつた。それは新吉原大菱屋の采女といふのである。此采女の許へ何處よりかせつ／＼と通ふ出家があつた。女郎の許に色即是空と悟るべき出家の通ふといふのも不思議である。比丘を墮す罪業は恐ろしいと云ふことは采女も知つて居たらう。しかし縁と云ふものは不思議なものである。佛教では縁と云

二 大臣 大盡と同じ。金持。

三 三叉 隅田川の新大橋と清洲橋との間、小名木川の入り口附近を云ふ。江戸時代は景勝地として知られた。

四 比丘 僧侶

ふものは仇敵のやうに教へて居る。夫婦は二世の縁であると云へば二世までも免れない風流罪業である。采女も此僧も宿世の因縁を免れないものか、つひに離れ難い仲になつた。然るに出家も餘り采女に通ひ過ぎたので段々貧しくなり、采女も身の皮を剥いでいれあげる、といふ勢であつたから、大菱屋の主人も雙方の爲めになるまいと考へて、堅くせて遇はせないやうにした。出家はそれからとう／＼影を見せなくなつた。多分淵河へでも身を沈めたことであらう。采女はそれが爲めに大さう力を落して、斯うなつたのもみんな私の爲であると泣いて居たが、つひに志を決したものと見えて、こつそり吉原をにげ出して、鏡の池に身を投げて死んでしまつた。其時上着を脱いで池の邊に棄て、置いたが、其小袖の中に一首の歌があつた。

いはずともそれぞとはしれ猿澤の

跡を鏡の池に残して

或本には「名をそれといはずともしれ猿澤の、あとを鏡の池にしづめて」とある。どちらであるか分らないが、其頃の吉原の遊女には斯様な氣節もあり、風流もあり、情趣もあつた。高尾の事を話す時に思ひ出したから筆のついでに記して置く。

五 猿澤池。奈良八景の一つに數へられ、興福寺五重塔が周囲の柳と共に水面に映る姿が美しいので有名。